

商学部における特色ある学部教育の補助「国内実態調査」 報告書

テーマ : 女川町と富岡町における震災と復興

科目名 : ベーシック演習

担当教員 : 中村亨

調査先 : 宮城県女川町および福島県富岡町

調査期間 : 2025年8月20日(水) ~ 2025年8月23日(土)

参加学生数 : 1年生 15名 2年生 名 3年生 名 4年生 名

15

調査の趣旨（目的）

宮城県女川町と福島県富岡町における東日本大震災による被害がどのようなものであったのか、また震災後にどのように復興しつつあるのかを、現地を訪問して震災を経験した方々、そして町の復興を担う方々の話を聞くことによって学び、理解を深める。

調査結果

女川町では公民連携による震災後の町づくりを中心になって牽引した阿部喜英氏のお話、そして震災後に女川町に移住して起業した原田氏のお話をうかがった。

女川町で新聞販売店を営む阿部氏は、民間の商工業者たちが立ち上げた女川復興連絡協議会の若手メンバーの一人として新たな町づくりの構想作成とその実現を中心的に推し進めた。どのようなコンセプトで町づくりを進めていったのか、当事者ならではのお話を聞くことができた。

また原田氏は、大学まで部活でサッカー中心の生活を送っていたもののスポーツを楽しめず感じられなかった時期があったというご自身の経験を踏まえ、個々人の運動能力にかかわらず子供たちがスポーツを楽しめるスポーツ教室を立ち上げ、自分の理想を実現するためにどのような工夫をしてきたか話して下さった。

富岡町では震災後に新たな特産品となる浜鶏ラーメンを開発した、株式会社鳥藤の代表取締役である藤田大さんによる震災経験と震災後の会社経営についてのお話、夜ノ森地区に帰還できるようになってから新たにバウムハウスよのもりを開店した遠藤一善さんのお話、そして玩具のサブスクリプションサービスの会社を起業した中山駿さんのお話をうかがった。また震災後に富岡町でワイン醸造とぶどう栽培を開始したとみおかワイナリーを訪問して農作業のボランティアに参加し、ワイナリーの創設者である遠藤秀文さんのお話をうかがった。

以下に示すのは、調査でお話を聞いた受講生たちが書いたレポートの抜粋である。

なお以下の報告を含めゼミ活動の記録は、受講生が作成した次のホームページで公開されている<https://chuo-nakamura2025seminar.jimdofree.com>

【原田直信さんのお話を受けて】

この研修旅行で様々な方々にお話を伺う中で最も印象に残ったのは、原田直信さん（株式会社つなぐ）のお話です。

原田さんは、スポーツ経験や社会人としての歩みを経て、子どもの非認知能力を育むことを目的に女川町で起業しました。彼が大切にしているのは、単なる運動能力の向上ではなく、子どもたちの自己肯定感や、主体的に動く力、他者と関わる力を育てることです。

提供するプログラムは、保育所や小学校での運動遊びを中心に構成され、地域の方々や保護者の方々に大きな信頼を得ています。他者と競うのではなく、こどもたち一人一人の小さな成長を見逃さず、どんどん褒めることで非認知能力の向上に繋がっているのです。さらに、子ども自身に選択や意思決定の機会を与え、家庭とも連携して動画や遊びを共有することで、生活全体に広がる仕組みを築いています。こうした活動を通じて、子どもたちは運動への苦手意識を減らし、自ら楽しむ姿勢や仲間と協力する力を身につけています。運動体力検査でも能力向上の結果が表れ、地域や教育関係者からの信頼も高まっています。

このお話で最も心に残ったのは、運動能力そのものよりも承認や自己肯定感が大切であるという考えです。子どもにとって他者との比較ではなく、昨日よりできたという小さな成長を認めもらえることが、前向きな成長につながるのだと改めて気づかされました。また、原田さんが自己肯定感の低さに悩んだ自身の経験を原動力にしている点にも強く印象を受けました。その課題観が、子どもには同じ思いをさせたくないという情熱となり、非認知能力を育むプログラムに昇華させている姿は、多くの人に勇気を与えるものです。さらに、小さな町だからこそ子ども一人ひとりに丁寧に関わり、地域全体で成長を支えるという考え方は、教育とまちづくりのモデルになると感じました。これらのお話から、原田さんの取り組みは、教育の本質を突きながら社会に希望を広げるものだと感じました。また、日常の中での承認や自己肯定感の積み重ねが未来を生きる子どもたちを支える力になることを、強く実感しました。

（写真1）



【阿部喜英さんのお話をうけて】

今回の研修旅行では、東日本大震災の被災地である女川町と福島第一原発事故の影響を受けた富岡町を訪れた。復興の現場に立ち、地域の方々の声を直接聞くことで、教科書や本では得られない“生きた知”に触れることができた。

その中でも女川町では、女川復興協議会の阿部喜英さんのお話を伺った。阿部さんは現在、道の駅の駅長を務めながら、女川みらい創造株式会社を通じて地域の再生に尽力されている。新聞店を営んでいた頃から「情報を届ける」ことを使命としてきた姿勢は、震災後の復興においても一貫しており、町の魅力や挑戦を発信する現在の活動にもつながっている。

印象的だったのは、「震災がなかったとしても、15年後には同じような課題に直面していたかもしれない」という視点だった。復興とは「元に戻す」のではなく、「次の世代へと繋いでいける町をつくること」だという言葉には、未来志向の強い意思が込められていた。

また、「一般論では町は変わらない。個別・具体性を持つことが重要だ」という指摘も心に残った。女川では「絞る」「回す」「増やして」という三位一体の戦略を掲げ、限られた資源を最大限に活用しながら持続可能な経済循環を目指している。

阿部さんのお話を通じて、私は「情報」と「意思」が地域の未来を形づくる力を持つことを実感した。女川の「変化し続ける町」という姿勢と、富岡町の「生活を取り戻す」復興の形。それぞれの違いを肌で感じながら、地域づくりの多様なあり方を学ぶことができた。

(写真2)



【藤田大さんのお話をうけて】

私は藤田さんのお話を聞いて、「2度目の人生をもらったようなもの。これからはもっと挑戦していこう」ということを仰っていたのが特に印象に残っています。藤田さんは大震災を経験しているからこそこの考えができたのだと思いますが、この考え方や意識は、私にとってもすごく参考になりました。自分でこの考えに辿り着くことは難しかったですが、貴重なお話を聞かせていただいた事で、自分自身「一度きりの人生、2度目の人生をもらったように後悔のないよう、やりたい事には挑戦していこう」と改めて思うことが出来ました。私もこのような考えを感覚では持っていたつもりですが、言語化していただけたことで自分にとって忘れられない言葉になりました。

また、「震災が来て、自分の番が来たと思った」ということも仰っていて、私もそのような考えができる人間でありたいと思いました。災害の影響を藤田さん自身も受けているはずなのに、被災地の方々のために一刻も早く動き出してお弁当などのサービスをしていたのは本当に凄いことだと思います。自分や家族の命が最優先というのは前提として、そのうえで他の人のために全力で動というのは、ある意味藤田さんのためにもなっていたと考えます。良いことをすると自分の気持ちも良くなるし、自己肯定感にも繋がると思うからです。しかし、誰でも人のために頑張れるわけではないと思うので、瞬時にその判断ができた藤田さんはやはりすごいと思いました。

(写真3)



【遠藤一善さんのお話をうけて】

遠藤さんはJR常磐線「夜ノ森」駅前にご自宅があり、この町で生まれ育ちました。しかし2011年3月11日の震災と原発事故の影響で、夜の森地区は帰還困難区域となり、12年ものあいだ立ち入りが禁止されました。2023年に避難指示が解除されましたが、震災前の賑わいは失われ、駅前にはものさびしい景色が広がっていたそうです。

遠藤さんは、まずこの町を“知ってもらうこと”が復興の足がかりになると考え、町民がお土産として持っていける物を作りたいと思い立ちました。避難中にお世話になった米粉バウムクーヘン店の店主に相談し、富岡産の米を使ったバウムクーヘンづくりに挑戦しました。

しかし建築士である遠藤さんには菓子づくりの経験がなく、既存の菓子店にも断られてしまいました。そこで腹を括り、自ら夜の森地区でお店を立ち上げることを決意。設計事務所を後輩に託し、スタッフ全員がバウムクーヘンを作れる環境を整えました。物件探しも難航しましたが、同級生が所有する元歯科医院をリフォームし、店舗として活用することになりました。

こうした試行錯誤の末に誕生したのが、富岡町産の米「天のつぶ」を100%使用した米粉バウムクーヘン「YONOMORI BAUM」です。オープン日には開店前から行列ができ、今では地域の人だけでなく、帰省客や県外からの常連客も訪れる人気店になっています。遠藤さんは、単なる利益追求ではなく、これから夜の森地区へ帰還・移住する人のためにも“ここで”商売が成り立つことを示す必要性を強く感じていると話していました。外装デザインにもこだわり、都会でも見劣りしない商品づくりを心がけている姿勢に、地元への深い愛情が表れていると感じました。

時間をかけながらも一歩ずつ復興へと歩む地元の姿を“三百六十五歩のマーチ”に例えられていた、そのさりげないユーモアに思わずくすりとしつつ、遠藤さんの芯の強さと温かい人柄が「バウムハウス ヨノモリ」の大きな魅力だと感じました。

(写真4)



【中山駿さんのお話をうけて】

大学の授業で福島県富岡町を訪れ、震災や復興の現状について学ぶ機会を得た。その際に伺った株式会社ニココのお話は、私にとってとても印象的だった。特に「おもちゃのサブスク」という取り組みは、地域課題や教育格差の解決を目指す重要な仕組みであると感じた。富岡町をはじめとする被災地域では少子化が進み、子どもの数が少ないために大規模な教育事業は成立しにくい現実がある。

そんな中でサブスクという形を用いて知育玩具を循環させる発想は、地域にとどまらず全国へ展開できる可能性を持っている。単なるビジネスというより、「小さな町からでも全国に発信できる仕組みをつくれる」という視点が、とても新鮮だった。また、この事業は子どもの教育だけに限らず、高齢者施設向けのプランを設けるなど、幅広い世代が楽しめる工夫がされている点にも驚かされた。おもちゃというと子どものためのものだと考えがちだが、遊びを通して大人や高齢者も交流したり心を豊かにしたりできるのだと学んだ。

被災地の復興という文脈で考えると、地域のコミュニティを再び活性化させる役割も果たしているのではないかと思う。さらに、知育玩具は「教育の入り口」でもあり、その購入負担の差が教育格差につながる可能性があることにも気づかされた。おもちゃを所有するのではなく、サブスクを通して必要な時期に必要なものを使える仕組みは、家庭の経済状況に左右されずに子どもが学びの機会を得られるという点で大きな意義がある。私自身、教育の格差という言葉を知ると学校や受験の話の思い浮かべていたが、もっと早い段階、日常の遊びから始まっているのだと理解できた。

今回のお話を聞き、復興や地域づくりは必ずしも大規模なインフラ整備や企業誘致だけで進むのではなく、小さなアイデアや身近な課題解決からも始められるのだと実感した。私自身も、地域の課題をただ問題として捉えるのではなく、工夫次第で新しい可能性に変えられるのだという視点を大切にしていきたい。

(写真5)



【とみおかワイナリーでのボランティアと、遠藤秀文さんのお話】

とみおかワイナリーについてだが、ここでのボランティア活動は本当に自分にとっていい

経験となった。合宿の日程として、ボランティア活動は最後に行った。それまでは、復興を行っている町の方々の話を聞くことが多く、自分で実際に復興に携われることはなかった。しかし、ワイナリーでの体験があったことで、これまでの方々のお話により重みが増した。また、畑で地域の方と汗を流しながら活動をしたことで、事前学習の時にはどこか遠くの話に感じていたものが実際に形になっていて、自分も小さくではあるが復興に携わることができるのだと実感した。

遠藤さんの貴重なお話について、遠藤さんのこれまでや、実際に震災の時に体験したことなど、本当にありがたい話ばかりだった。特に話を聞いていて地元愛がとても強い方だと感じた。地元に戻ってくる年齢を自分で定め、それまでに何をしなければいけないのか、何を学ぶ必要があるのかを考え、すべての行動に意味を持たせていたのだな、と感銘を受けた。自分はこれまでなんとなく生きてきたが、それでは育ててくれた地域に、家族に、友人に恩返しができないなと話を聞いていて感じた。

遠藤さんのお話、ワイナリーでの体験を通して、自分はこれからどんな人間になりたいのか、何がしたいのかを考えながら生きていこうと思う。

(写真6)

